

國學院大學學術情報リポジトリ

挨拶：日本の伝統文化教育の可能性：
人間開発学の基盤構築に向けて

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新富, 康央, 赤井, 益久 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001195 |

挨拶

新富康央（國學院大學人間開発学会会長、

國學院大學人間開発学部教授・同学部長）

皆さんこんにちは。今日は、國學院大學人間開発学部長としてではなく、國學院大學人間開発学会会長として、最初に御挨拶をさせていただきたいと思います。

人間開発学会というのは、國學院大學の建学の精神にふさわしい、新しい学問領域を開拓しようということで始まりました。今回の第二回大会では「日本の伝統文化教育の可能性」という視座での追究。まさに國學院大學の名にふさわしい、新しい教育・研究領域の開拓ということになるのではないかと思っております。

まず、このテーマの意義について少し話させていただきます。教育畑の人間にとりまして、「バイブル」といわれますのは、やはり教育基本法であります。その教育基本法が戦後ずっと変わらなかったのですが、平成十八年に改正されました。

その中で、新たな課題として出てきましたのが、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」です。

まさに國學院大學というのは、学生さんも『國學院大學ガイドブック』で見たとありますが、「日本を知り、世界に発信する」というのが國學院ですから、まさに新しい教育基本法そのものが、國學院大學の姿勢ということになってくるのではないかなと思っております。そういう意味では、今日の学会大会テーマは、



時を得たテーマではなかったかと思えます。

しかし、実際には、文科省がそういう形で伝統文化教育と言っても、教育現場では何をどうしてよいのか分からないというのが実態です。

実は昨日、第四十一回博報賞の贈呈式に行ってきました。私どもももらったんじゃないですよ。（笑）審査員の一人として参加させていただきました。そのときに、「日本文化理解教育部門」という審査部門で、文部科学大臣奨励賞を受賞された団体としては、京都の西陣中央小学校が、京都の文化の伝統教育を二十数年にわたってずっと継続させており、それが単なる継続というよりも、さらにそれを「発展」させるといふ形の創造的「継

続」をしているということでの受賞でありました。

それから、博報賞を受賞された中の一人は、オランダから来られた、アウテンボーガルト・ロギールという方です。四万十川の源流近くの村で、もうすでに棄てられていた和紙作りを、他の地域に行きまして五年間修行し、そこに入り込みまして十八年間、外国の人が、担い手が居なくなっていた和紙作りを広めた、ということです。しかも、彼は「もっともつと掘り下げたい。日本でしかできないこと、そういうものを自分はさらに研鑽し、そして広めていきたい」などと、挨拶の中でも言うておりましたけど、そういう形で伝統文化教育の〈芽〉はいくつか生まれているのです。

しかし、その〈芽〉は生まれているのですが、それをどう繋いでいくかという、この作業を誰かがしなければならぬ。そして、どこかでしなければならぬ、といったときに、この國學院大學の人間開発学部には素晴らしい先生がたくさんおられて、私も仲間に入れてさせていただいています。

これはもう三年前になりますが、『道徳と特別活動』(二四—七、平成十九年)の巻頭論文で、私は「今なぜ教育に「伝統・文化」の学びなのか」ということを論述しました。

また、今回、皆さんに配られた資料の中にも入っていますが、文部科学省教育課程課・幼児教育課が編集している『初等教育資料』平成二十二年十一月号の特集「伝統・文化に関する教育の充実と展開」の中で、本学部の安野功先生が、「伝統・文化に関する教育を充実させるためのポイント」という論説を寄せられております。

それから、『神道文化』第二十二号(財団法人神道文化会、

平成二十二年)の冊子です。後ろに置いております。私や成田信子先生、太田直之先生、藤田大誠先生等が参加した財団法人神道文化会の座談会で話したことが、この一冊の貴重な冊子になっております。

そういうふうには、本学に研究の〈芽〉は出ているのですが、こうして一堂に会して議論が体系的にできるといえるのは、実は今回が初めてということでありました。ありがたいことに、遠路お越しいただいた皇學館大学の櫻井治男先生、上越教育大学の畔上直樹先生からも様々な御教示を賜ることとなっています。そういうことで、今日の午後というのは、実は新しい始まりなのだ、ということ聞いていただけたらなと思っています。

最後に、前に文部科学省の事務次官をされていた銭谷正美先生(東京国立博物館館長)から、今国立博物館で特別展「東大寺大仏—天平の至宝—」という展示会が開催されているので、できれば是非観覧してほしいという要望をいただいておりますので、関心がある方がいましたら、案内チラシをお持ちいただけますらなと思っております。これは東京国立博物館なのですが、ご存じのように、國學院大學には伝統文化リサーチセンター資料館という研究施設がありますので、将来的には、協力協定を結んでいただき、研究の実をさらに豊かにすることができれば、と願っております。

そういうことで、國學院大學人間開発学部を「伝統文化教育」の〈発信地〉の一つにしたいと思っておりますので、どうか宜しくお願い致します。これで御挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

挨拶

赤井益久（國學院大學教育開発推進機構長、

同文学部教授）

皆さん、こんにちは。

今、御紹介がありましたように、教育開発推進機構長を務めております赤井と申します。

本日は第二回の人間開発学会大会、誠に開催おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

「伝統文化」を、今日はメインにして、先生方の御講演、シンポジウムがあると存じますけれども、実は國學院大學の学統といましようか、学風といましようか、そのもつとも基本に置かれるのが「告諭」というもの、有栖川宮職仁親王の告諭というのがございまして、そこには、国の「本」、「本ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ」。つまり、「学問ノ道」は「基本」にある。古えより今日まで続く礎を、「国の基」を究むるところだ、と。これは校歌にも歌われている通りであります。

平成二十年の四月に公にしました、國學院大學の「研究教育開発に関する指針」、大きな方針でございますけれども、そこには三つの基というのを謳っています。

「伝統と創造」、「個性と共生」、「国際性と地域性」の調和を図ることが國學院大學の基本的な方針なんだ、ということ宣言を致しました。

その中にある「伝統と創造」というのは、言い換えれば、「伝統文化」とそれを新たに「創造」していくということが、我々國學院の使命である、と謳っています。



今、新富学部長からも御紹介がありましたけれども、教育基本法、学校教育法、それから、中教審の答申と、平成十八年、十九年、二十年と、相次いでこの「伝統・文化」が大事であるということ宣言しております。

学生諸君には、「伝統文化」と「伝統・文化」というのは、実は異なるということを御理解いただきたいんです。

本日は、恐らくその前半の部分、われわれの拠って立つ基盤、「日本人」というのは何なのか、國學院大學でなぜ、我々は勉強をし、学んでいるのか、ということ、意味合いを是非、深く認識していただきたいと思えます。

共催として、一言御挨拶を申し上げます。